

団交報青

44.4.25

農工学生会

我々は、昨日の6時間余に及び、評議会教授会団交に於いて次の真を教授会に追求した。
4.12の問題、それに伴う4.13の教職員大会、そして工学部の工業振興会の問題へと進展して
い、K。4.15の学長団交に於いても明らかにな、た様に教授会も又、学校当局の姿勢と何ら
変わらないものとしてあつた。いうならば、我々が4.12の問題を語る時、大学とは何か、
学問とは何か、教育とは……ということも語らないかぎり把握できないものとして官憲乱入
事件は、あつたにもかかわらず、教授会はその本質の問題を一切語ることなく、現象面のみ
をとらえ、いわば、学生も悪いがケイサツも悪いといつた都合、何ら論理性をもたない、問
題の本質をインペイした形でしか語らなかつた。その都合姿勢にあっては、教授会の過去一
環とした姿勢であり、何ら実際に取り組んでいることは、残念ながらできない現実の情況と
してある。我々は、かような教授会の姿勢に対し、教授が、教育者の立場、又、学者、研究
者の立場というものを、一切放棄した現実の教授の姿をバクロしていつた。そこにみける教
授の姿は、ことごとかれ主義で、極めて没主体的なものとしてロテイされK。今日、全都全日
で数多くの学園斗争が、先達的な学友によつて主体的に斗い抜かれていゝが、その中の教授
の姿が、極めて先K返へK、悲しい姿が存在している。我々は、教授会に対する糾弾の固い
意を一致し、その高Kで悲劇的な夢を共に勝ちとつた。

そして、討論は、工業振興会の問題へと進展し、教授会の没主体性、無責任さ、無能さ、
etc.を全面バクロへと展開した。工振のものが、如何なる性質を持つたものとしてあつた
のか、又、現代的にどの様な内実を獲得しているのか。現代的には、工振の内実が、昨年
産にみえて、映画会、講演会が、2~4回もあつただけで、工振の基本的理想である「学生に
還元する」ということが極めて、少ない現実にあつて、寄付であつたが、学生の二重取りの
役割もつかないものである。昨年の総入は二十万円余りもあつたが、現実的に我々学生に寄与
されたのはわづか7万円足らずで、あとの金額は、どこに使われているか不明確なものとし
てあつた。我々は、その内実なる計理公開を工学部長でもあり、工業振興会の理事長でもあ
る高木亀一教授に要求した。そして、そこで明らかになったことは、工学部事務長の発案に
よつて、工振の原簿は二重帳簿ではないのかという極めて重大な問題が烈然としてきた。
しかし、それは事務長の一方的な発言でもつて真事をつかむことは不可能ではあつたが、
そのことを契機に、工振の内実が全くないこと、工振は学生の二重取りとしてあつたこと、
教授会も工振に対し何ら明確な方針さらには、工振の真体のなさを追求した。

この様に、教授会たるものが極めて教育に於いて、没主体的なものとしてしかなく、問
題の本質を一切語ることなく、ものごとを現象面的に又は、学生対策的にしかとらえていな
いという教授会に対し今後も我々のするどい追求のほこきをつづけていかななくてはならな
い。4.12に対する教授会の対応の仕方、その姿勢を我々は断固追求していかななくてはなら
ないし、工振を構成している教授会、教授個々が自らの学問性をもちて物質に打ちこつて
こなかつた犯罪性、その様な真体としてある教授会を、大学の自治は教授会の自治だとい
うこと自体、大学の自治なるものを内部から崩壊せしめていゝ何ものでもないことか、丁史的
けいか、又、昨日の団交に於いても全面的にバクロされた。その様な教授会であつたなら、
それは何ら意味を持たず、すぐ解体しなくては、矛盾の再生産の材料としてしか位置しえな
くなるだろう。

生田の学友諸君！我々は、工振の問題に関して、4.12の事件に際して再び、我々の、
鋭い矛先を教授会に向け、教授自らの学問性と問ひ正そうではな

4.26 PM.1:00より2003番教室で再度団交をもつことと確認した。

26日に我々、学生と、教授との学問性の激烈な斗いを再度展開しようではな